

デカルトにおけるマテーシスと想像力(2)
——『省察』の認識論——

武田 裕紀

La mathesis et l'imagination chez Descartes (2) :
la théorie de la connaissance dans les *Meditationes*

Hiroki TAKEDA

デカルトにおけるマテーシスと想像力(2)

——『省察』の認識論——

武田 裕紀

La mathesis et l'imagination chez Descartes (2) :
la théorie de la connaissance dans les Meditations

Hiroki TAKEDA

【キーワード】 デカルト、純粋数学、(能動的な) 想像力、知性、『省察』

0. 『規則論』から『省察』へ

『規則論』と『省察』とにおいて同一の問題を論じるにあたり、デカルト研究史上、触れておかなければならない論点が2つある。ひとつは、1630年から31年にかけてのメルセヌ宛の書簡において表明され、その後、全面的に披露した言説は見当たらないものの著作・書簡の端々に看守されるとされる永遠真理創造説である。当時の複数の書簡をもとにこのテーゼの大枠を示せば、①数学的真理や矛盾律などの永遠真理と呼ばれるものは神によって自由に定められ、②そして神は一方で、物質的世界をその永遠真理とともに創造し、③他方で、われわれ人間の精神に生得的にこれを与えた、というものである。このテーゼから帰結するいくつかの論点のうち、本論と深くかかわってくるのは次の点である。すなわち、われわれが神によって生得的に与えられた永遠真理を認識するのは知性である、そして物質的世界も同じ秩序によって創造されているのであるから、われわれは数学的な仕方でも自然を探究するにあたって頼るべきは知性であって、誤りやすい想像力ではない、それゆえ1630年以降のデカルト哲学においては、学問的真理認識に当たって想像力の活躍する余地は小さい、というものである¹。

デカルトの主要著作において、永遠真理創造説がいかほどの強度で働いているのかについては議論の余地があるにしても、われわれはこうした先行研究に総論では反論するものではない。しかし

* 本研究は「近代初期における学知の方法と論証 — メルセヌからアルノーまで —」(基盤研究(C)、研究代表者: 武田裕紀、課題番号: 16K02223) および「17世紀におけるマテーシスの確実性・射程・有用性に関する研究」(基盤研究(C)、研究代表者: 武田裕紀、課題番号: 20K00282) の研究成果の一部である。

** デカルトからの引用は、*Œuvres de Descartes, publiées par Ch. Adam & P. Tannery, Paris, la nouvelle édition, 1996.* (=AT版) による。以下、AT版の巻数とページ数を記す。なお、傍点強調はすべて論者による。

¹ こうした解釈は小林道夫『デカルト哲学の体系』勁草書房、1995、pp. 13-39。永遠真理創造説をそれほど重視しているようには見えないゲルーも、『省察』の内的構造の観点から、数学的真理は神の誠実性によって保証されるとしており、やはり知性的認識に基づけている。Martial Gueroult, *Descartes selon l'ordre des raisons*, Aubier, 1950, vol. 1, pp. 333-334.

そのうえで、こうした解釈が射程に入れているところのものは、われわれの課題とは位相が異なることにも注意を促しておかなければならない。なんとなれば、「神の定めた永遠真理」とは、純粹知性によって把握される量一般について妥当することであり、そのかぎりにおいて、たしかに生得観念としてわれわれに植え付けられ、知性によって引き出されるものであろう。しかしわれわれの課題であるところの数学的な実践にあたって求められる延長は、けっして抽象的な量一般ではなく、あれやこれやの個別的な数学的対象であって、それゆえ知的認識の基礎付けである永遠真理創造説とは異なった地平に展開する。こうした個別的な数学的対象に関する具体的延長については、その認識にあたって想像力がいくばくか介入し、さらに『規則論』と『省察』のあいだに緩やかな連続性と方法的な厳密化があるというのが、本稿の立場である。

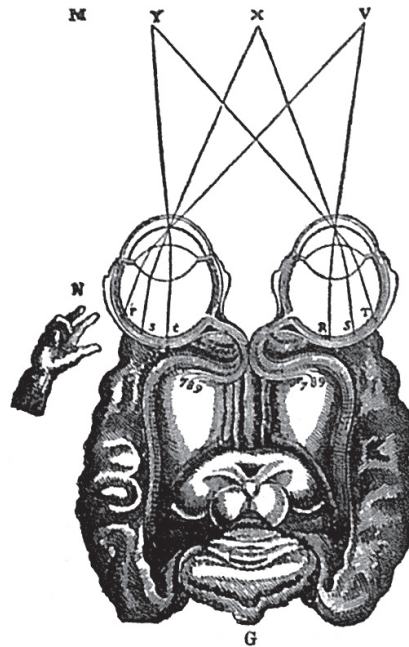
もうひとつの論点は、コギトの哲学の確立である。『規則論』においては、基体としての物体と人間精神とを対峙させる形でわれわれの認識のあり方を探ろうと試みていたので、物質的なものにかかわるためには知性は物体から抽出された想像の補助を得なければならなかった。それに対して、『方法序説』以降においては、確実な真理であるコギトから出発し、その観念内容を精査することで、確実な学に耐えうる知識を弁別するのだが、そのさい、想像力に対して総じてネガティブな評価が下される。たとえば、「第二省察」での蜜蠟の分析では、物体実体を把握するのは想像力ではなく知性であるとされるし、「第六省察」で物体の存在を証明するにあたって、想像力は外的事物の存在を蓋然的に明らかにするに過ぎないとされる。要するに、想像力によっては、事物の真理に至ることもできなければ、コギトの外の世界に抜け出ることもできない、というわけである。

こうした『省察』における想像力の権限については、本論のまさしく主題となるところのものである。ここでは本テーマの取り付きとして、アルモガートの指摘しているあるエピソードを挙げておこう²。以下は「屈折光学」第六講の一節である。

(…) 私たちは同じことを片眼によって、場所を移動することによってなす。そうするには、線分Ssの長さ、XSsおよびXsSという二つの角によって作られる大きさが、われわれのファンタシア(en notre fantaisie)においていっしょに存在し、それが点Xからの距離を認識すれば十分なのである。そしてそのことは、思惟の働きactionによってなされるので、それはたんなる想像(imagination toute simple)でしかないとしても、やはりそのうちに測量士がするのと同じ推論(raisonnement)を含むのである。彼らは近づくことにできない場所を測量するのに、二つの違った観測点によって行う。(AT, VI, 138)

² Jean-Robert Armogathe, « L'imagination de Mersenne à Pascal », in *Phantasia ~ Imaginatio*, Edizioni dell'Ateneo, 1988, pp. 264-265.

(図 2)



まずテキスト内において注目すべきことは、距離感の認識という具体的な局面で「思惟の能動 action」としての想像力をデカルトが明確に述べていること、そして、これを *fantaisie* (通常の語法では *imagination* ということもできる) という身体部分を表す語と区別していることである。これは『規則論』の段階においては概念装置としては明確とは言えなかった、想像力の能動性と受動性の疑念の余地なき表明である。

次に、クルセルによる「屈折光学」のラテン語訳に関する事柄である。クルセルは *en notre fantaisie* を *nostrae imaginationi* と訳す一方で、*imagination toute simple* を *juducium simplex* と訳している。つまり、*fantaisie* に伝統的な *imaginatio* を当てたのに対し、「思惟の能動」さらには「推論を含む」と敷衍されるフランス語の *imagination* には、*imaginatio* ではなく「判断」*juducium* というラテン語を当てたわけである。このことから看取できるのは、少なくとも17世紀前半の読者（そして現代の17世紀研究者）にとって「思惟の能動」としての想像力は、当時の標準的なラテン語の *imaginatio* の語感としては違和感があったこと、そしてなにがしかの能動を含みうる「判断」が適切であると感じられたことである。

もし、「屈折光学」と同じように、能動的な想像力が『省察』にも認められるのなら、その想像力は、「屈折光学」で外的事物の距離感をつかむために有用であったように、コギトから物的世界にアクセスするにあたってなんらかの役割を演じうるのではないか、つまり知性的な仕方とは別の方向から科学的認識を可能にするような視座が開けるのではないか、これが本稿の論点となる。以下では、第一論文と同じ構成によって、まず「純粋数学」がテキストにおいて意味するところ、次いで想像力が『省察』において果たす役割について検討しよう。

1. 『省察』におけるマテーシス

『省察』の歩みにおいても「純粋数学 $mathesis\ pura$ ³」という語はたびたび現れ、そのプロジェクトは基軸的な役割を担っている。ところが、『省察』における純粋数学は、「関係と比例」をその核心にもつ学問のこととされた『規則論』とは異なって、「物的な本性」であり、かつ「物質的事物は、純粋数学の対象であるかぎり存在することが可能」と定義されている。「純粋な」数学が、本来「混合的な」数学が対象とするはずの物的な本性とかかわるとは、いったいいかなることか？この点を理解するための手掛かりとして、1638年3月のシエルマンズとデカルトのやりとりを参照してみよう。

さて、往信のシエルマンズ書簡は、『幾何学』に関して「私は、それ(=『幾何学』)は幾何学であるというより純粋数学であると言いたいのです。それは、もはや幾何学とも算術とも他の数学的諸学とも共通性をもたないからです⁴と、デカルトのプロジェクトを称賛する。当時しばしば参照されたファン・ローメンの『数学総体の理念』(1602)によると、「真なる数学」は「純粋数学」と「混合数学」に分類され、さらに「純粋数学」は「普遍数学」と「特殊数学」に下位分類され、前者には「第一数学」として「計算術 $supputatrix$ 」が、後者には「数論」と「幾何学」が割り当てられている⁵。つまり「純粋数学」とは、「普遍数学」よりさらに上位のきわめて抽象的で論理的な規則として想定されており、シエルマンズの『幾何学』に対する評価はこのような分類を念頭に置いたものであるように思われる。

ところがシエルマンズのこのような評言に若干の不满をもったのだろうか、デカルトは次のように応答している。

実際、そこで私は、算術に本来属することについては何も説明しませんでしたし、順序とともに計量にも関わってくる問題で、その例がディオファントスにあるような問題については何ひとつ解きませんでした。ですが、さらに私は運動についても何も論じませんでした。少なくとも私が作り上げた純粋数学 $mathematica\ pura$ は、主として運動を研究することに関わっているのです。⁶

デカルトは、シエルマンズが用いた「純粋数学」という語を引き取りつつも、その内実についてはかなり異なった意味付けを施している。それは、計算術、算術、幾何学を含み込む普遍数学の上位類としての純粋数学ではなくて、「主として運動を研究することに関わっている」という。この

³ デカルトにおける $mathesis$ の考証については、Frédéric de Buzon, *La Science cartésienne et son objet*, Honoré Champion, 2013とりわけII. *Les Meditations et la physique : la constitution de la mathesis pura*, III. *La Mathesis des Principia*: sur l'article 64 de la seconde partieが、もっとも信頼がおける研究である。

⁴ シエルマンズからデカルト宛、1638年3月(AT. II, p.56)。

⁵ Giovanni Crapulli, *Mathesis universalis: genesi di un'idea nel XVI secolo* Edizioni dell'Ateneo, 1969, pp. 209-241. 佐々木力『デカルトの数学思想』岩波書店、2003、pp. 414-429。ここでの「計算術」とは「算術」とは異なり、「算術が一定の性質を示すのに対し、計算術は、いかなる論証もいかなる数の性質も顧慮せずに、算術の定理や命題とは大いに異なる発見と判断のごくわずかな規範、きわめて一般的な規範」とされる。

⁶ デカルトからシエルマンズ宛、1638年3月23日(AT. II, 71-72)。

純粋数学の定義は、「形や数や運動」⁷という『省察』におけるこの言葉の定義との共通点が確認できる。

もう少しこの引用を読み込んでみよう。「運動についても何も論じませんでした」とデカルトは述べているにもかかわらず、『幾何学』が運動を論じていないわけではない。というのも『幾何学』が扱う代数曲線とは、「一つの連続的運動によって、または相続く多くの運動によって、しかも後の運動がこれに先立つ運動によって完全に規制されているごとき運動によって」⁸生成されるという、運動に基づいた制約をもつからである。したがって、デカルトがここで問題としている運動とは、曲線の生成にかかわる幾何学的運動ではない。そうではなくて、純粋数学が関わっている運動とは、むしろ物理＝数学的な広義の数学における運動のことだと考えられる。じっさいに、シエルマンス宛の続く文面が、光における粒子の運動の解明に延々と費やされていることも、この見方を裏付けているし、また同じ時期にメルセンヌに対して次のように語っている。「塩や雪や虹などについて私が書いたことを検討して頂ければ、私の自然学全体が幾何学に他ならないことをご存じになるでしょう」⁹。ここまで踏み込めば、物体的な本性を対象とするという『省察』における純粋数学の定義とも符合してくるであろう。じっさい『方法序説』以降のデカルトが追い求めているのは、普遍学の一部門としての抽象的な数学ではなくて、物体的な本性を対象とし、それゆえ自然学にもかかわることができるような具体的な数学である。

この純粋数学の語義はきわめて独特である。仏語訳したリュイヌ公が「幾何学者の論証に対象を提供する」というようにパラフレーズし、この語の使用を避けたのももっともであろう。たしかに『規則論』のデカルトは、純粋数学に関して「関係と比例」をその核心にもつ学問とし、伝統的なアルシュテッドやファン・ローメンの分類表に収納しうるような定義を与えていた。しかし『省察』においては、自身のかつてを「思い起こし *meminique me*」、過去形で「形とか数とかその他、あるいは算術もしくは幾何学、あるいは一般には純粋で抽象的な数学 *puram atque abstractam mathesim*」に属するものについて (…) もっとも確実なものを見なしていた (AT. VII, 65)¹⁰と述懐していて、『規則論』においてマテーシスの対象としたものから距離を置くような姿勢をとっている。

だからと言って、『省察』における純粋数学が、『規則論』における純粋数学の定義である「関係と比例」に矛盾するというわけではない。むしろ、デカルトにとっての「物体的な本性」とはある種の比例関係——すなわち「関係と比例」——を保ちながら場所を移動していく幾何学的延長のこ

⁷ ここで「数」が現れるのは、意外に思われるかもしれない。というのは、数は、「実体、持続」とともに、「私自身の観念から取り出されたもの」(AT. VII, 44)だからである。したがってデカルトがここで念頭に置いている「数」とは、このような数一般ではなくて、たとえば、しばしば例として挙げられている三角形や五角形の辺の数のことなどのように思われる。なお、『哲学の原理』において幾何学と同義とされる「抽象数学」(AT. VIII-1, 78)では、「数」が削除されて、形と運動のみになっている。「物体的事物の質料としては、幾何学者たちが量と名付けて、彼らの論証の対象としているもの、すなわち、あらゆる仕方分割され、形作られ、運動させられることができるものよりほかに認めない」(AT. VIII-1, 78-79)。さらに、1643年6月28日エリザベト宛書簡でも、「おもに形や運動を考察するさいに想像力を使用する数学の研究では」(AT. III, 692)と述べていて、「数」は含まれていない。

⁸ 『幾何学』(AT. VI, 389-390)。

⁹ デカルトからメルセンヌ宛、1638年7月27日(AT. II, 268)。

¹⁰ この「純粋で抽象的な数学」という語も、フランス語版では削除されている。

とであるから、『省察』の純粹数学とは『規則論』におけるそれが受肉したものということができよう。また『規則論』においては、「関係と比例」は、連続量と離散量それぞれについて等しく当てはまるものであり、それゆえあくまで数学的な技巧にとどまっていたが、それに対して『省察』においては、物的な本性を強く志向しているため連続量が離散量に対して存在論的に優位にある、つまり離散量を連続量に従わせる¹¹ことになり、それゆえ延長（連続量）の確保という哲学的課題に収斂することとなった。このように『省察』における純粹数学は、デカルト的な意味において幾何学化された対象全般に及ぶ。本章で対象とするマテーシスとは以上のような意味であることを確認しておきたい。

2. 『省察』における想像力

想像力とマテーシスが構成する問題群を『省察』のテキストに沿って予めなぞっておこう。想像力ないし描かれた像の問題は、第一、二、五、六省察にそれぞれ主題的あるいは副次的に出現する。第一省察では、「物体本性一般、およびその延長、さらには延長をもつ事物の形、量すなわちこれらの事物の大きさなど」として描かれる「私の意識のうちにある事物の像」は、夢の懷疑を生き延び、欺く神の試練を受ける。第二省察では、蜜蠟が何であるかを知るのは、「精神のみによる洞見」によるのであって決して想像力にはよらないとされる。第五省察では、神の存在論的証明に先立って（あるいは並行して）三角形を想像するとき、その観念は三角形の本質と区別されえないことが主張される。第六省察では、外的事物の存在の蓋然性が想像力に依拠して説明される。この省察の歩みの中でマテーシスと想像力の問題が水面に浮上してくるのは第五、六省察であるが、受動的な想像力の位置づけを確認するために、第二省察から議論を始めることにしよう。

2-1. 蜜蠟の分析と想像力

第二省察における蜜蠟の比喩は、蜜蠟は何であるのかを知るのは想像力によってではなくただ「精神の洞見」のみによることを述べた箇所である。そのため想像力という問題系は、この挿話的な分析の中では直接的に論じられるわけではない。しかし蜜蠟を理解するためのプロセスにおいて想像力を退けているというその事実は、われわれの論点を間接的に囲い込んでおくための手掛かりを与えてくれるのではないか。そういう意図のもと、1980年代以降、蜜蠟の分析に関する諸議論の基盤を提供しているベイサッドの論文¹²を導き手としつつ、三つの論点を検討していきたい。

まず第一に、「個別の蜜蠟」の知得のために、身体機能としての感覚や想像力が退けられ、知性

¹¹ これは Vincent Jullien, *Descartes. La Géométrie de 1637*, PUF, 1996, p. 73 による表現である。この小型本は、pp. 14-18 で想像力と幾何学についても簡潔にまとめている有益である。

¹² Jean-Marie Beyssade, « L'analyse du morceau de cire. Contribution à l'étude des "degrés du sens" dans la Seconde Méditation de Descartes », in *Sinnlichkeit und Verstand*, 1976, Bouvier Verlag Herbert Grundmann, pp. 9-25. この論文には邦訳がある。デカルト研究会編『現代デカルト論集 I フランス編』勁草書房、1996、pp. 241-267 所収。また、香川知晶「精神の洞見と「実体」——デカルトの蜜蠟の分析について」、デカルト研究会編『現代デカルト論集 III 日本編』勁草書房、1996、p. 91-108 参照。

作用すなわち「精神のみの洞見」が称揚されるさいに、その知性によって知られうるのは、物体の属性としての延長なのであろうか。そうではない。というのも、ホッブズに対してデカルトは、この箇所ですなわち「私は物体の形相的根拠について論じたことはない」(AT. VII, 175)と明言しているからである。それではデカルトはここで物体のいかなる存在論的身分を射程に入れているのであろうか。ベイサッドはここでラテン語版にあらわれる ipsam という語、すなわち「蜜蠟それ自体」「物体それ自体」という表現に注目する。『省察』は言う、「われわれはたとえば、蜜蠟がそこにあるとするならば、われわれは蜜蠟それ自体を見ろというが、色あるいは形より推測して蜜蠟がそこにあるとわれわれは判断するとは言わない」と。つまり、ここで精神の洞見によって知られているのは、さまざまな変化を被る蜜蠟の様態や性質ではなくて、蜜蠟それ自体すなわち実体である、というのがベイサッドの回答である。純粹知性のみが、実体という抽象的存在を、延長というその属性から分離できる、逆の言い方をすれば、実体の観念は、理性的区別によって理性ないし知性があらゆる想像から解放される時に得られるというわけである。このようなベイサッドの強い解釈には、多少の違和感を感じる研究者もいるであろうが、少なくとも、蜜蠟の分析は形而上学的な存在のレベルについて論じていること、それゆえ、たかだか自然学的なレベルにまでしか及ばないわれわれの主題とは、射程に入れている存在論的身分が異なることを確認しておこう。

第二に、身体的機能としての想像力と、精神の様態としての想像力の区別である。蜜蠟の分析の前半部での想像力は、アリストテレスを踏襲して「どんな動物ですら持つことができる」(AT. VII, 32)のものであった。ところがこの分析の後半部では、蜜蠟を見たり触ったりすると「思う」ということ——つまり精神の様態としての思惟——からわれの存在が明証的に帰結する、すなわち「蜜蠟を想像することまさにそのことから蜜蠟を想像するわれが存在するということを確実に認識する」(AT. VII, 33)と述べる。このふたつの想像力は、明らかに同一の事態ではない。というのも、この前者において取り上げられている感覚と想像力は、身体的機能としてのそれであり、他方、後者で導入されている想像力とは、思惟する事物の様態としてのそれだからである¹³。そして第三省察冒頭で、「私が感覚および想像と名付けるあの思惟様態は、たんにそれらがある種の思惟様態であるかぎり、私のうちにある」(AT. VII, 35)と宣言したのち、省察の歩みにおいて想像力という語が担うのはおもに後者であり、純粹数学の対象が考察されるのもこの後者の領野においてである。

第三に、こうしたふたつのタイプの想像力は、デカルトの学問的探求において周到に準備されたものである。われわれが第一論文で『規則論』において見出した二つのタイプの想像力は、デカルト哲学の変遷に応じて若干様相を変えつつも、『省察』において再現されているように思われる。われわれの見立てによると、『規則論』においては、身体の部位としての「想像力 (phantasia

¹³ ベイサッドによるとこの区別は、デカルトによって分節化された、感覚が思惟にもたらされる三段階（『省察』「第6反論に対する答弁」(AT. VII, 436-437)）のうちの第一段階と第二段階、すなわち、前者は、外的事物が直接的に身体器官（すなわち共通感覚まで）に引き起こす生理学的なプロセスに対応し、また後者は、その外的事物によって作用を受けた身体器官に結合されているものから、精神のうちに直接的に結果するものに対応する。しかし、感覚はともかく、想像力についてもこの感覚が精神にもたらされる三つの段階を正確に対応付けることは、想像力というものの特性を考慮に入れれば、やや無理があるように思われる。

vel imaginatio)」(AT, X, 414)だけでなく、精神の機能すなわち認識力は、受動的な仕方では「想像と協力して共通感覚から形を受け取る」こともあれば、能動的な仕方では「新たな形を作ろうとする novae fingat」こともある。そしてこうした精神の能動的な機能のうちに、16世紀における数学の確実性論争で重要な役割を果たしたプロクロスからの広範な影響を認めたのであった。われわれが引き続き第五省察から第六省察冒頭を分析するさいに焦点を当てる想像力とは、あくまで意識様態であって、それは外的事物の受動的な受け止めであるかもしれない、あるいはまた能動的な投射であるかもしれない、ここで容易に断じることはできないものの、「蜜蠟を想像する我が存在する」という一文から、後者を強く読み込む根拠はじゅうぶんにあると考える。

とはいえ『規則論』の想像力理論は、デカルト哲学の変遷に伴って、『省察』の段階とは大いに異なっていることに注意を払わなければならない。というのも、精神の機能としての能動的な想像力は、『規則論』では身体的な部位の想像におそらくは直接的に働きかけるのに対し、『省察』ではあくまで「思惟の様態」として精神の内部に留まっているからである。このように、『省察』における2つの想像力は、『規則論』以来の想像力概念を、コギトから出発して世界を覗く体系に即して再構成したと見ることができるだろう。

2-2. 純粹数学の対象と想像力

「物体的事物の本質について」(AT, VII, 63)論じた第五省察から、物体的事物の存在を証明する第六省察へと至るパスサージュにおいて、一貫して重要な役割を果たすのは想像力である。本章では、第五省察と第六省察冒頭部分までの想像力を追跡しつつ、①想像力と知性の関係、②精神の機能としての想像力の射程、を検討しよう¹⁴。

2-2-1. 想像力と知性

まず、物体的本性の認識にあたって知性によって獲得される数学的観念は、第四省察の明証性の規則を受けて、「私にまったくよく知られていて分明」であることが確認される。一般的な意味での数学的観念だけでなく、無数の形状や運動といった個別的な数学的観念は、「すでに前に知っていたことを想起するかのよう、私のうちに前からあったのだが精神の目を向けていなかったものに、初めて注意をするかのようと思われる」(AT, VII, 64)。ここには、神によって生得的に植えつけられた数学的観念が、知性によって引き出されていくという生得説が描出されている。

このような知性的な認識とは別に、第五省察は冒頭で、「物質的な事物が私の外に存在するかどうかを問う前に、それらの事物の観念を、これが私の思惟のうちにある限りにおいて考察する」と宣言したうえで、「この量(連続量)を備えたものの縦、横、高さにおける延長を、判明に想像す

¹⁴ 『省察』以降におけるマテシス概念の包括的な研究としては、Frédéric de Buzon, *Op. cit.* とりわけII. *Les Meditations et la physique: la constitution de la mathesis pura*, III. *La Mathesis des Principia: sur l'article 64 de la seconde partie*を参照のこと。『省察』における想像力の問題に踏み込んだものとしては、村上勝三『感覚する人とその物理学』知泉書館、2009。とくに、79～80頁における想像作用と純粹な知解作用との差異に挙げられた論点は示唆的である。

る」(AT. VII, 63)と述べる。ここで、量を「判明に想像する」さいの想像力は、明らかに、蜜蠟の実体の認識においては無力とされた身体的な機能としての想像力ではなくて、精神の様態としての想像力である。というもここでは「私の思惟のうちにある限りにおいて考察」しているからであるし、さらに、三角形のもつ「ある一定の本性、あるいは本質、あるいは形相」(AT. VII, 64)が実際にその三角形に属するとする論点からしても、それが物的なものまで及ばないことは明らかである。また、われわれは量をあくまで「判明に」想像することはできるが、「明晰に」想像するわけではないことにも、注意を促しておこう。明晰な認識は知性の任務であり、量を判明に想像するとは、のちのモルスアテの書簡の言い方によれば、「この存在(延長)のうちには、限定された大きさとし、その一つが決して他の部分ではないような部分を、想像によって区別することができる」¹⁵というような事態である。

さて、「私が三角形を想像するとき」、その観念の出どころとしては、まず第一に、「私の精神に依存するものでもない」(AT. VII, 64)。すなわち想像力に頼って数学的観念を認識するかぎりにおいては、神によって生得的に与えられた観念から引き出すわけではない。第二に、かといって「私によってでっちあげられる *a me finguntur*」ものでもない。というも、そうした数学的事物は「不変にして永遠な、ある一定のその本性、本質、形相」をもっていて、想像された数学的観念が、私の単なる気まぐれや、感覚的観念を組み合わせる捏ね上げたような幻想ではないからである。第三に、思い描かれた数学的観念は、「私の思惟の外には世界のどこにも存在しない」にもかかわらず、一方で知的に把握された観念と、他方で外的世界の事物と、対応づけたい気持ちに駆られるので、そのため、想像によってたとえば五角形を思い浮かべると「ある特別な心の緊張」(AT. VII, 73)を強いられる。とりわけこの点において、純粋な知性によって五角形を理解する場合とはわれわれ自身もはっきりと区別することができる。想像された数学的観念は、このように生得的とも外来的とも言えず、ある種の能動性を帯びるという点において作成的と言うことができよう。だからといって任意に想像が許されるものではなく、不変で永遠な本質の枠をはめられたかぎりで生み出されたものである。

物的な本性の認識にあたっては、知性によっても把握できるしこのように想像によっても思い描くことができる。とはいえ、知性と想像力は別々の事物を対象としているわけではない。ホッブズに対してデカルトは言明する、「どのようにして同じ事物を一方では知解し、他方では想像するのかということの説明しました」¹⁶と。

ここで注意しなければならないことがある。ホッブズの反論は、想像がもつことになる「ある観念 *ideam aliquam*」が、推論によって思い量る *colligare* という精神の概念作用とどのように繋がるのか、デカルトの説明では明確ではないという異議であった。ところがデカルトの答弁においては——上の引用においても——、「観念」という語は用いず「同じ事物 *res* を一方では知解し、他方

¹⁵ デカルトからモア宛、1649年2月5日(AT. V, 267-279)。

¹⁶ 第三反論に対する答弁(AT. VII, 178)。

では想像する」と述べているように、知解され想像されるものの観念ではなく、対象としての事物が問題になっているのである。すなわち、千角形が千の辺からできていることを「知解する」することと、千の辺を「想像する」すなわち「あたかも千角形が現前praesentiaしているかのよう」(AT. VII, 73) 見つめることは、それぞれ精神の別の機能であるが、とはいえ、その対象となる事物は同一であり、それゆえわれわれは千角形というものについて正確に推論し同時に図形としても操作できるわけである。もちろんこのことは、明晰判明に認識できる事柄すなわち純粹知性の対象にしか当てはまらないのであるが。

このように想像力と知性は常に同一の事物を対象としており、また数学=物理的な対象に携わるには両者は常に協同しなければならない。とはいえ、『省察』における知性と想像力の協同の仕方は、『規則論』のそれとはおおいに異なる。『規則論』では、「知性は想像力、感覚および記憶から助力を受けなければならない」、とりわけ何か物体に関係をもちうるものを吟味しようと企てるならば、「そのものの観念をできるだけ判明に想像力の中に形成」(AT. X, 416) し、想像力という身体的な部位に描き出された形象に知性が向き直ることで両者の協同が成立する(AT. X, 415)。それに対して『省察』においては、あくまでも精神の機能として両者が協同する。ただし協同するとは言っても、それは対等な関係ではなく、知性が想像力を飼い馴らしうるかぎりにおいて協同する、そのような関係である。想像力はきわめて奔放である。その奔放さゆえに、本来なら想像力は及ばないものでさえも想像力によって把握できると錯覚し、そして人は誤謬に陥る。あるいは想像力の持つ存在論的コミットメントを高く見積もりすぎて、「想像されないものはすべて可知的intelligibleでないかの如く」¹⁷ 思い込み、想像されたものを安直に真と見なしてしまう。暴れ馬の想像力に知性の手綱をつけて、しっかりと御してやらなければならない。このような方針に従って学問を進める人ならば、知性によってはめられた枠組みを超え出ることのないような表象すなわち延長と運動に留まり続けるであろうし、その中でもさらに数学に修練した人ならば、より知的に理解したものに近い表象を思い浮かべ、より適切かつ迅速に数学=物理の問題に対処できるようになるであろう。

2-2-2. 精神の機能としての想像力

次いで、精神の機能としての想像力の射程について見ていこう。われわれは「物質的事物に心を向ける」と、その間は「想像の能力を用いることを経験する」わけだが、『規則論』がそうであったように、精神の機能としての想像は、身体的な部分の想像力に働きかけて、外的事物にアクセスするための開かれた通路となりうるのであろうか。答えはノンである。第六省察は想像を次のように定義する。「三角形を想像するとき(…)、理解するばかりでなく、その三つの線を、あたかも現前しているもののように、精神の眼で直観intuorするのであって、これこそ、私が想像と名付けるものの働き」(AT. VII, 72) であると。このとき、たしかに精神は物的な形相を観想するのだ

¹⁷ 『方法序説』第四部(AT. IV, 37)。

が、それはあくまで観念のレベルまでであって、「たとえ幾何学的な図形が物的なものであるにしても、だからといって、それによって幾何学的な図形が知解されるための観念は、想像力に落ちてこないかぎり (quando sub imaginatione non cadunt)、物的なものと考えられるべきではない」¹⁸。想像という働きは「いわば閉じられた窓の中」(AT. V, 162) の出来事なのである。『情念論』のより整備された語り方によれば、「われわれの知覚は、一つは精神を原因としてもち、他方は物体を原因とし」、前者については「意志によって引き起こされるすべての想像やその他の考えを知覚する」(AT. XI, 343)。想像はあくまで精神の能動である意志によって引き起こされ、描かれた像はあくまで観念的知覚のレベルすなわち精神の様態にとどまる。したがって、想像力を介することによっては、物体が存在するとは、せいぜいのところ「蓋然的に推測する」(AT. VII, 73) ことしかできない。この「蓋然的に推測する」とは、スコラの哲学に対して若きデカルトが下した評価、すなわち「疑いの数を増すだけ」の「蓋然的な推論 *probabilium syllogismorum*」(AT. X, 363) と同工の文言であり、明らかに否定的なニュアンスが込められている。「蓋然的に推測する」という皮肉を込めた評言には、数学に実在的な価値を与えんとして想像力の存在論的な重みに過度な期待を寄せる学説¹⁹に対する、たいへん厳しい見解が込められているように思われる。

それゆえに外的事物の存在に至りつくためには、「色、音、味、苦痛」のように「感覚から記憶の助けによって想像力にまで達した」(AT. VII, 74) 生き生きと伝えられる観念を検討しなければならない。ここでいう「想像力」には、蜜蠟の分析で見た身体的な機能としての想像力が、まさしく一回かぎり顔をのぞかせている。閉じられたコギトの世界から感覚を通じて外的事物に抜け出ようとするには、たしかに身体的な機能としての想像力に訴えかけざるをえないはずである。そしてそこには、心身結合というデカルトのアポリアを解くカギがあるのかもしれない。しかし、その段階はもはやマテーシスの対象ではない。

思惟の様態としての想像力が外部の世界に通じていないとはいえ、私が物体の方に向き直るとき、想像する力は「私とは異なった何ものに依存するように思われる」のは自然なことであろう。それでは果たして、想像された表象は、外的世界となんの対応も持たないのであろうか。この問いは、「もしある物体が存在し」という仮言命題によって導かれる議論の中で展開される。もし物体が存在するならば、想像するには、「精神が自己を物体に向け、その物体のうちに、精神自身によって理解された観念なり、感覚に知覚された観念なりに対応するあるものを (*aliquid in eo (= corpus) ideae (...) conforme*)、直観する」(AT. VII, 73)。あるいは想像力とは、存在するところの物体に対する「想像力という能力のある適用 *applicatio*」(AT. VII, 72) と考えられる。想像的観念と物体との「対応」や、物体に対する想像力の「適用」と言われるように、そこで得られた観念は物体との相関性において捉えられている。それは、あくまで「内的経験のレベルのことであり、(...) 想像力にはそのような物体に知性や感覚によって獲得された観念を精神の方から投影する作用がある」²⁰と

¹⁸ 第五反論に対する答弁 (AT. VII, 385)。ここでの想像力は身体的な部位のことである。

¹⁹ 第三論文でピッコローミニの例を挙げる。

いうことである。したがって、外的事物がまさしく想像力に描かれたとおりにあることの保証にはならないけれども、想像力を媒介として内的経験と外的世界が相関づけられる意義は大きい。そして、この相関性さえ確保されれば、数理的な自然学を樹立するために十分な条件が満たされているのである²¹。

* * *

以上の作業の中で明らかになったことは、第一に、『省察』の段階においてマテーシスという語によって想定されているのは、自然学の対象となりうるような、ただし観念として見られたかぎりでの延長と運動であること、第二に、延長一般はそれ自体としては明晰なものとして知性によって認識されるが、さらに判明に想像することによって、外的事物との相関性を得ることができること、第三に、そうだとするならば、想像力はコギトの外へとアクセスするための閉じた窓であるが、それでも自然学を構成していくための橋頭保となりうるということ、であった。では、かような精神の内部に想像力によって表象される像とは、いかなるものであろうか？そしてこれが数学＝物理の問題に対処するのに有効であるとは、具体的にはいかなる事態であろうか？第三論文では、この問題を自然学関連テキストにおいて検討し、本稿で分析した『省察』の第五省察から第六省察の前半が、デカルトの科学的方法の基礎を成していることを、具体的に確認していきたい。

²⁰ 小林道夫、『デカルト哲学の体系：自然学・形而上学・道徳論』勁草書房、1995、p. 273。

²¹ 冒頭で挙げた「屈折光学」における距離感の把握について、これまでの『省察』の分析を踏まえ、再度、取り直しておこう。距離感の把握は、ある対象が、二つの眼球という離れた二点から捉えられ、それぞれの像が身体の部位としての想像力において共にあるのだが、この二つの平面的な像に対して、測量士が行うようなある種の推論を伴った想像力を駆使して、立体的な像を構成するということにあった。こうして得られた立体的な視覚像を対象物にあてがうことによって、その対象物の奥行（距離）を割り出すことができる。

この事態は、本稿の『省察』の分析に即してもう少し一般的に言えば、平面的な感覚像を元手としつつも、推論や「自然の幾何学」といった知的な働きを補助を得ることによって、能動的な仕方でも遠近法的に描像された立体像を投射し、これを対象物にあてがう。こうしてわれわれは、対象物に関する実際的な知識を得るわけである。ここには、生の感覚的与件を不確実な知識として退けつつ（感覚に対する懐疑）、推論＝能動的な想像力によって再構成し、外的世界に関する同型的な知識を得ようとする、『省察』の歩みのひな型を見ることができる。そしてこの事例は、科学的実践——すなわち感覚的所与を元手としつつも、現象との相関性をもつモデルを像として打ち立てて、観察によってモデルの妥当性を検証するという、第三論文で見ることになるデカルトの科学的方法論——とも一致することになるであろう。